

館蔵品から⑦

伊藤小坡(1888-1955)
《つづきもの(下絵)》
1916(大正5)年
紙本墨画淡彩
206×112cm



身支度を終えたひとりの女性が、台所で新聞の連載小説を読みふける様が描かれている。この作品は、1916(大正5)年の第十回文展に出品されて好評を博した《つづきもの》の天下絵。この天下絵をもとに制作された本画(福富太郎コレクション)には、『大坂朝日新聞』という新聞名や「虚栄の女」という小説名、日付までもがこと細かに画中の新聞に描きこまれている。森田草平によるこの小説は、1916年5月17日から8月24日まで実際に連載されていたらしいので、この作品は、詳細な台所の様子も含め当時の風俗をよく伝えているといえよう。

ところで、下絵類は思いがけず作者の思考のあとを教えてくれることがある。この天下絵と先述の出品作の間にも興味深い違いがあり、小坡の考えを知る一助となると思われる。天下絵では九日、出品作では八日に変更されている日めくりの日づけがそれである。わずか一日と思われるかもしれないが、実はこの差は大きい。新聞に描き込まれた日付は九日になっており、画中のできごとは天下絵の日付と同じ九日とわかる。小坡は構想段階では九日だった日めくりを八日と前日に変更することで、日めくりをめくり忘れるほどに夢中になる女性の姿を描き出そうとしたのだ。日々慌ただしく過ごす女性が、自分の楽しみのためだけに時間を使う、その至福のひとつを画面上に凝縮しようとした小坡の思いがこの天下絵にははっきりとのこされている。(Mm)